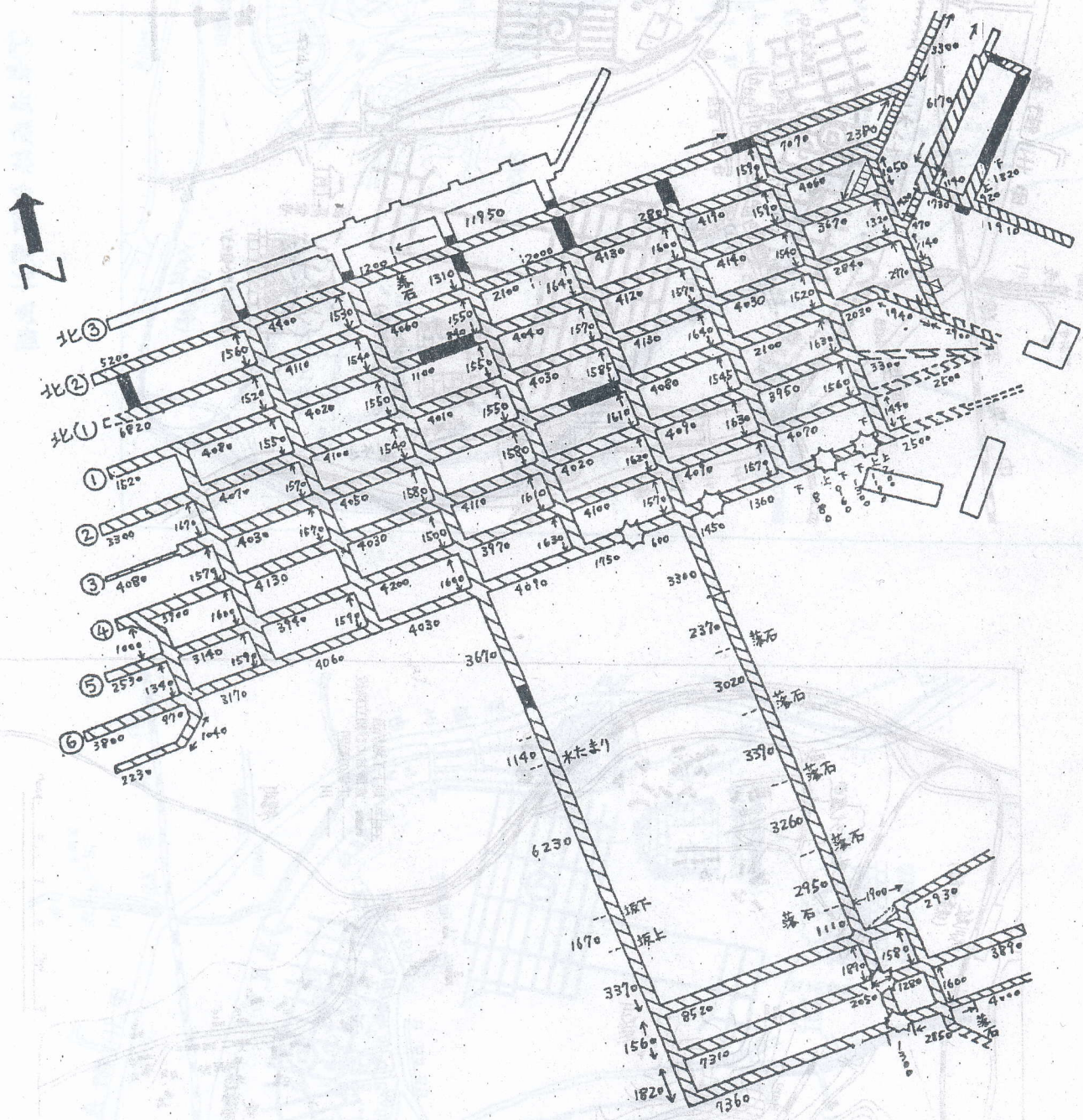
地下壕の実測　坑道の距離

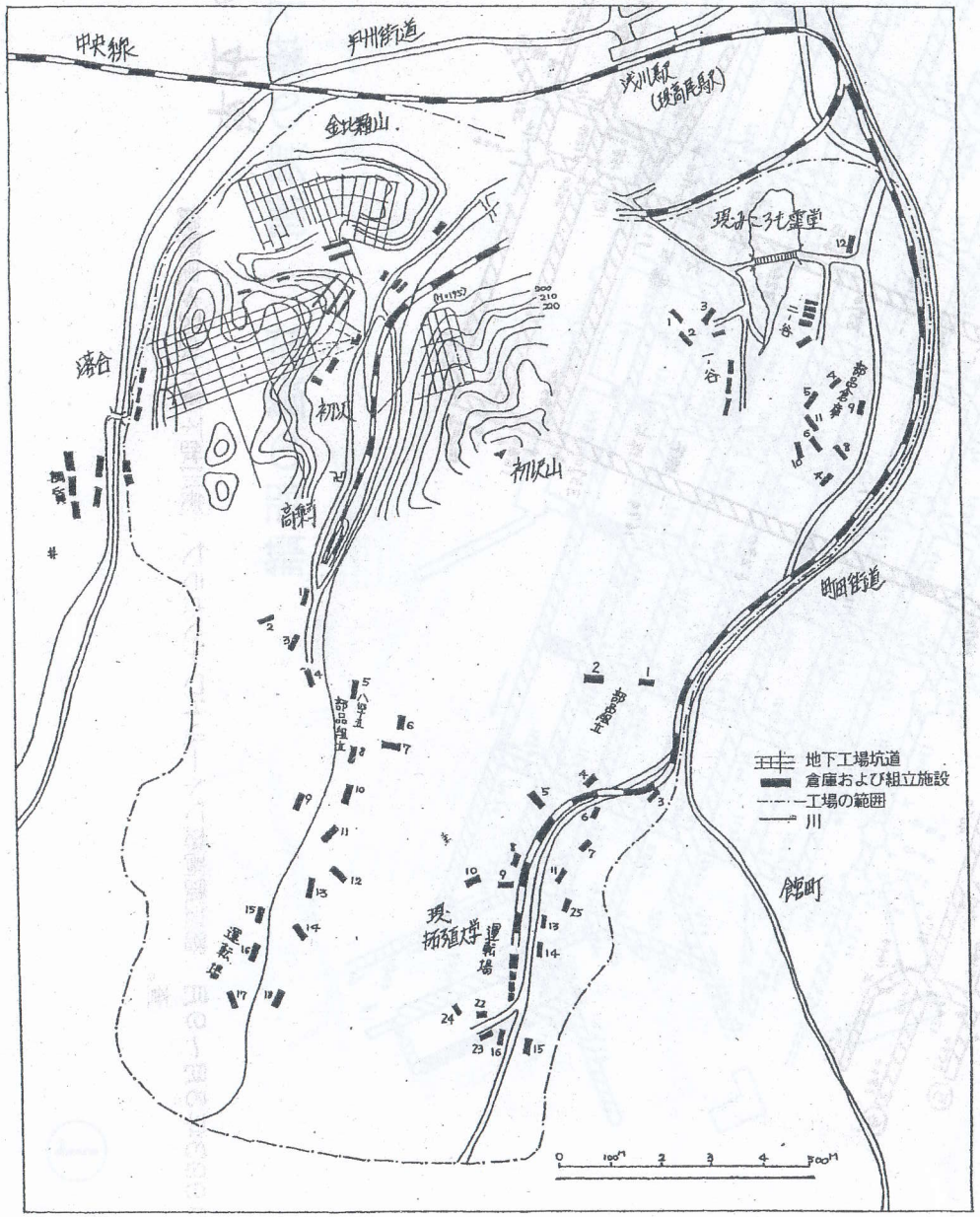


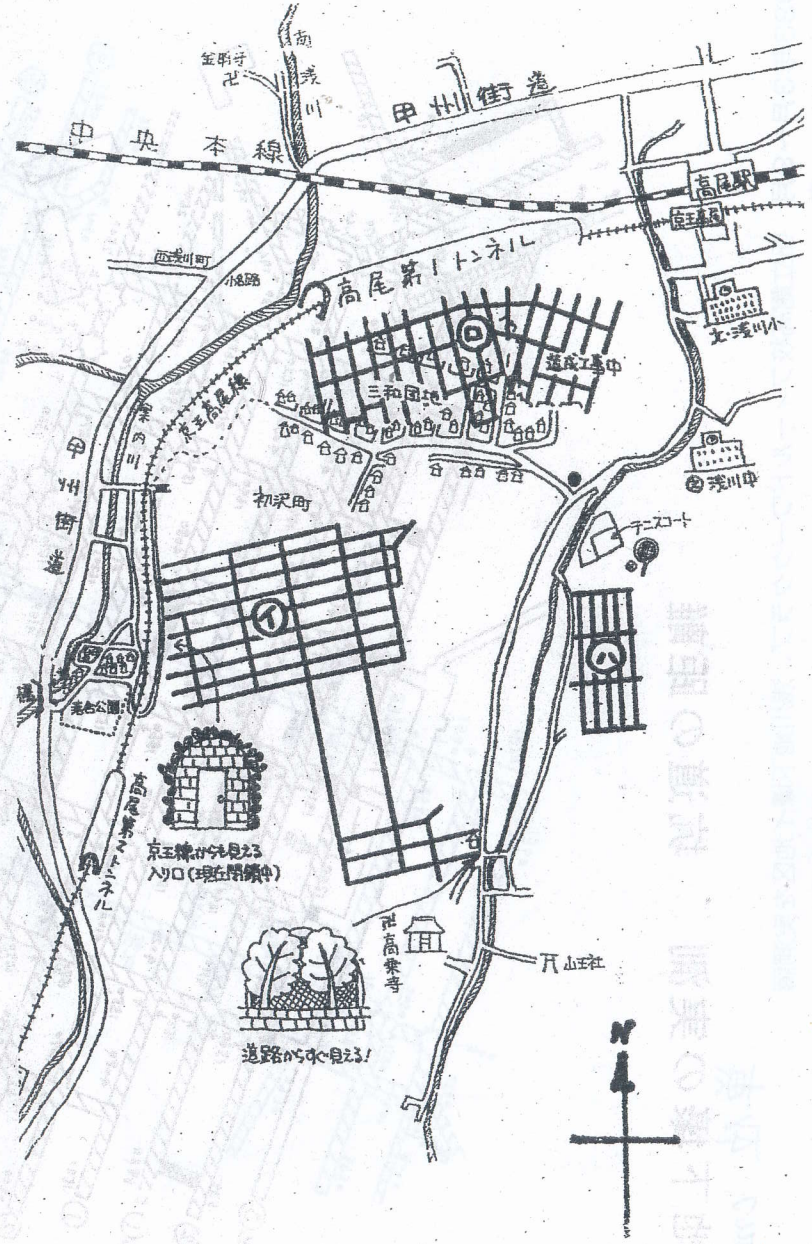
単位 cm

1993年3月～9月　都立館高校フィールドワーククラブ、浅川地下壕イ地区を実測調査。

②　㊙　㋐製造廠綜合配置計画図

配置図





資料提供＝八王子市郷土資料館

浅川地下壕（中島飛行機地下工場跡）見学資料

①浅川小学校・飯場跡・みころも霊園
②浅川中学・引き込み線跡・金比羅山・ロ地区地下壕・ハ地区地下壕
③高乗寺・イ地区地下壕　　解散

浅川地下壕関係年表

1944(昭和19)年
5月 陸軍軍務局は浅川を大本営の移転候補とするが，信州に変える。
9月 浅川倉庫工事第1期イ地区(落合)工事，陸軍東部軍指揮，鉄道建設興業請負で掘削始まる。
1945(昭和20)年
2月 イ地区工事完成，第2期工事，中島飛行機武蔵製作所第1製造廠としてイ地区の工場整備，ロ地区(金比羅山)・ハ地区(初沢山)の掘削工事始まる。
2～8月 中島飛行機浅川地下工場(イ地区壕6本)で工員1000人以上により工作機を据え，軍用飛行機発動機の製作，イ地区17492㎡，ロ地区10244㎡，ハ地区3830㎡の地下壕75%完成。作業所，事務所，倉庫，調整施設，食堂，宿舎，貨物用引込線路の地施設造営。
8月 敗戦により中島飛行機浅川工場停止。
9月 浅川工場，連合国軍GHQが管理し，これ以降工作機械は賠償物資として搬出される。
1973(昭和48)年
7月 設楽政治著「高尾山麓夜話」に浅川地下壕の覚え書き紹介
1974(昭和49)年
10月 大信工業浅川地下壕イ地区を「幻の大本営」観光施設として公開。
1989(平成元)年
5月 三和団地下水道工事に伴う陥没事故で地下壕ロ地区の再見。私立高校移転用地にも地下壕あり，大きな問題となる
1991(平成3)年
3月 八王子市議会，浅川地下壕を戦争史跡として認め，請願を採択。
9月 都立館高校文化祭「浅川の大地下壕を探る」展示。
11月 浅川小学校で「浅川地下壕物語」上演。
1993(平成5)年
3～9月 都立館高校フィールドワーククラブ，浅川地下壕イ地区を実測調査。
5月 私立高校移転計画白紙撤回。
1997(平成9)年
11月 「浅川地下壕の保存をすすめる会」を浅川小学校で設立。
1999(平成11)年
1月 イ地区南端の壕内で工事用火薬3トン発見。
2002(平成14)年
4月 住宅地に重なるロ地区一部埋め戻し工事完了。
8月 文化庁による近代遺跡詳細調査の対象となった50箇所の戦跡に浅川地下壕も含まれる。
2006(平成18)年
2月～8月八王子市、「市街地内丘陵地のみどりの保全に関する条例」に基づき、「金比羅斜面緑地保全区域」高尾町・初沢町計73765平方㍍を指定。

③

資料

昭和２０年度第一次朝鮮人労務者割当表

日本土木建築統制組合

所在府県名	工場事業名称	施工者	下車駅	割当数	徴用斡旋別
群馬県	中島飛行機株式会社 地下建設工事（藪塚）	鉄道建設興業株式会社	桐生	１，０００	斡　旋
栃木県	東京第一造兵廠 全　上　（鹿沼）	〃	鹿沼	４００	〃
岐阜県	三菱発動機名古屋製作所 全　上　（平牧）	〃	広見	４００	〃
〃	名古屋造兵廠 全　上　（帷子）	〃	全	４００	〃
長野県	陸軍省地下建設工事（松代）	〃	屋代	４００	〃
福岡県	全　上　（山家）	〃	山家	４００	〃
北海道	函館本線増設工事	〃	七飯	３００	〃
宮城県	東北本線増設工事	〃	一ノ関	２００	〃
東京都	中島飛行機株式会社 地下建設工事（浅川）	大倉土木株式会社	浅川	２００	〃
宮城県	萱場製作所 地下建設工事	丹野組	仙台	１００	〃
北海道	函館船渠株式会社 防空施設工事	逢沢組	函館	２００	〃
静岡県	宇久順鉱山土木工事	鹿島組	沼津	２００	〃
全	日本軽金属株式会社 仁科選鉱場施設工事	栗原組	全	１００	〃
神奈川県	川崎工業用水道拡張工事	間組	小田急柿生	２００	〃
	計１４件			４、５００	

勤労局

注(2) 昭和二十年度ニ於ケル割当数ハ第一次（４月～６月）分ノミナルコト

④

三つの地下壕

地下壕	工　事	民間会社	朝鮮人	飯　場	特　　徴
イ地区	第一期 1944.9 ～ 1945.2	佐藤工業	５００ ？	初　沢	・東西にのびる９本の坑道とその連絡坑さらに南へ延びる２本の長い坑道からなる。大規模なスケールで碁盤の目のように整然と掘られている。ほぼ完成。 ・敗戦まぎわには、地下工場として使われた。戦後の1970年代は、マッシルームの栽培に使われ坑内には栽培箱や資材、トレイ（容器）などが散乱している。 ・ダイナマイトが発見され撤去された。 ・地震研究のため計器が設置された。
ロ地区	第二期 1945.2 ～ 1945.8			落　合	・三和団地・金刀比羅山の地下に眠っている未完成の地下壕。岩盤が弱く、ぼろぼろと崩れやすい。中島飛行機の地下工場用として掘られた。 ・数年前、道路の下水道工事中にぽっかりと穴が開き、団地の住民は陥没するのではないかと不安を持っている。 ・2002 年４月、団地の下に位置する地下壕が埋め戻された。
ハ地区	第二期 1945.4 ～ 1945.8	大倉土木	１００ ？	原	・一番小さい規模で、坑道も狭い。未完成。計画図とはまったく異なってメチャクチャに掘られている。掘削途中の坑道が多く、掘り方の過程がわかる。中島飛行機の地下工場用として掘られた。 ・坑内には、松の坑木やカスガイ、針金やトロッコの枕木跡が残っている。

	イ　地　区	ロ　地　区	ハ　地　区
位　置	東高尾山稜 の中腹地下	金比羅山・ 三和団地の地下	初沢山の中腹地下 （浅川中学校南側）
工　事	第一期 1944.9 ～ 1945.2 竣工 1945.2	第二期 1945.2 ～ 1945.8	第二期 1945.4 ～ 1945.8
計画規模	９本の坑道群と ３本の坑道群	１５本の坑道群	５本の坑道群
面積 本　坑 連絡坑	１２，１８０㎡ ５，３２１㎡ 合計１７，４９２㎡	７，４７２㎡ ２，７７２㎡ 合計１０，２４４㎡	２，８５８㎡ ９７２㎡ 合計　３，８３０㎡
完成度	８０％	８０％	６５％
総延長	約４，２００ｍ	合わせて約６　０００ｍ	
下請会社	佐藤工業		大倉土木 （大成建設）
朝鮮人 労働者	約５００人？		約１００人？
飯　場	初沢（みころも霊堂）	落合	原
当初の 使用目的	東部軍の地下倉庫	中島飛行機地下工場	
活　用	戦前 中島飛行機地下工場 1945.6 ～ 8 戦後	戦前－未完成のため活用されず 戦後－活用されず	戦前－未完成のため活用されず 戦後－活用されず
現　状	マッシュルームの栽培一時、一般公開される	2002.4 団地の下に位置する地下壕が埋め戻された	2002.3 急斜面の防災工事がなされた

米国戦略爆撃調査団報告書

「中島飛行機会社の地下工場　浅川」

この工場は、中島飛行機会社武蔵製作所の疎開地であり、東京都八王子市から西へ 3.2Km の浅川村の西端の険しい丘陵中に位置している。

この工場は、1ヶ月に 300 台のエンジンを生産するために、床面積 32,800 ㎡、工作機械 1200 台と計画され、1945 年 7 月までに操業に入る予定であった。しかしながら、 8 月の戦争終結時には、23,900 ㎡の広さが掘削されていたにすぎず、計画されていた 31 本のトンネルのうち 6 本しか完成していなかった。 330 台の機械が据え付けられ、 7 月からエンジン部品の生産を始めていた。他に 95 台の工作機械が現地に搬入されていたが、据え付けられていなかった。

トンネルは、 3 つの区画において格子状に掘削された。ここには、以前からのトンネルや鉱山も存在していなかったので、掘削はまったく新しく行われた。この工場は、掘削残土の山や、カモフラージュを施していない事務所や倉庫用の新しい地上建物によって、外部から容易に探知できる。

トンネルは、およそ幅 4,6m、高さ 3,7m で、長さは 120m から、370m までさまざまである。雨で、少なくとも 6ヵ所のトンネルの天井が崩壊したため広範囲に木の支柱が施されていた。

中島飛行機会社は、地下工場でエンジン部品を製作し、丘のかなり上方に分散している地上建物で最終組立をする計画であった。

1945 年 8 月 15 日までに、約 10 台のエンジンを完成させた。それに加えて、第 4 トンネルには約 300 個のクランクケースの鋳物が、第 3 トンネルには大量のシリンダーヘッドが貯蔵されており、さらに他のエンジン部品の未加工品が多数貯えられていた。離れて建っている格納庫式の 2 棟のちいさな建物には、組立中の 18 台のエンジンがあった。

トンネル内での部品運搬のため、トンネル 2 本には狭軌レールが敷設されており、 3 本目のトンネルには全長にわたりローラーコンベアーが装備されていた。しかし、他の場所では、運搬は人手だけにたよっていた。

動力旋盤、タレット旋盤、ドリルプレス、研磨機、平削り盤、グラインダー等、通常のタイプの工作機械はほとんど据え付けられていた。据え付けられていた 330 台の工作機械の 80 %はアメリカ製であり、ブラウン、シャープ、シンシナティ、ワーナー、スワジー、アメリカン・マシン・トゥール、ブラード等のよく知られた会社の製品であった。他にも明らかにアメリカ製のものがあった。

操業中の 6 本のトンネルは、次のような加工作業に使われていた。

第１　シリンダーヘッド
第２　シリンダー筒
第３　クランクシャフト
第４　プロペラシャフト
第５　プロペラシャフト
第６　エンジン付属品

この工場の操業上の最大の問題は、湿った床と空気に起因した。検分したすべてのトンネル（第１～第６）の床が濡れており、数か所では数インチ（1 ｲﾝﾁ=2.54cm）も水が溜っていた。このため、作業員の健康を著しく害し、機械の腐食は深刻であった。調査時には、機械には保護のためグリースを塗り、油紙の覆いがされていた。にもかかわらず、機械の多くはひどく錆びていた。写真 21 ～ 25 は、工作機械や工場内部を写している。

工場の管理者は、新しいシリンダーが不足していたので、エンジンの生産に中古のシリンダーを使用しなけらばならなかったと報告している。このことは、組立工場内の中古のシリンダーの在庫数が新品のものよりもわずかであるが多かったことで確認された。

浅川は、1945 年 10 月 24 日に実地調査した。

「日本の航空機の地下生産　結論」

日本の地下軍事施設は、飛行機生産を保全するにはその建設開始が遅過ぎた。かりに早期に建設したとしても、地下工場は、生産に必須な原料や燃料の欠乏という別の問題を克服できなかったであろう。

建設方法に新しいものはなく、民間の専門技術を越えるものは見当たらない。ただ、トンネル、洞窟、坑道のおびただしい数は印象的である。

トンネル固有の湿気が、精密機械や従業員の健康・士気・能率に悪影響を与えた。もし、機械を錆びや腐食から守って使い続けようとすれば、操業中の相当の期間、空気調節や排水が必要である。それに加えて、従業員に十分な食事を与えなければならない。作業には十分な照明も要する。作業員には太陽灯が有益であっただろう。

地下生産は、設計の行き届いた地上の工場であれば自由にかつ簡便に利用できる運搬手段がなくて、難儀したであろう。

地上工場に通づる国道や線路が遮断されると、原料の供給や完成品の運搬が滞って、生産を遅延させた。

地下施設の最大の利点は、発見されにくいので攻撃目標となることが少なく、第２次大戦で使用されたいかなる兵器からもおそらく安全だということである。

毒ガス兵器は、地下を使用不能にしたであろうが、これには空気清浄装置によって対抗されたであろう。細菌兵器は、地下作業によって体力も抵抗力も低下している従業員に有効であったであろう。

とはうえ、いろいろな欠点があるにもかかわらず、きわめて重要な生産施設を整備された地下建造物に収容することは、どの国にとっても有益だとみることができる。もし、日本がその地下移管計画をもっと早期に着手していたならば、それらの地下疎開工場は連合軍にとって一層の難題となっていたであろう。

⑥

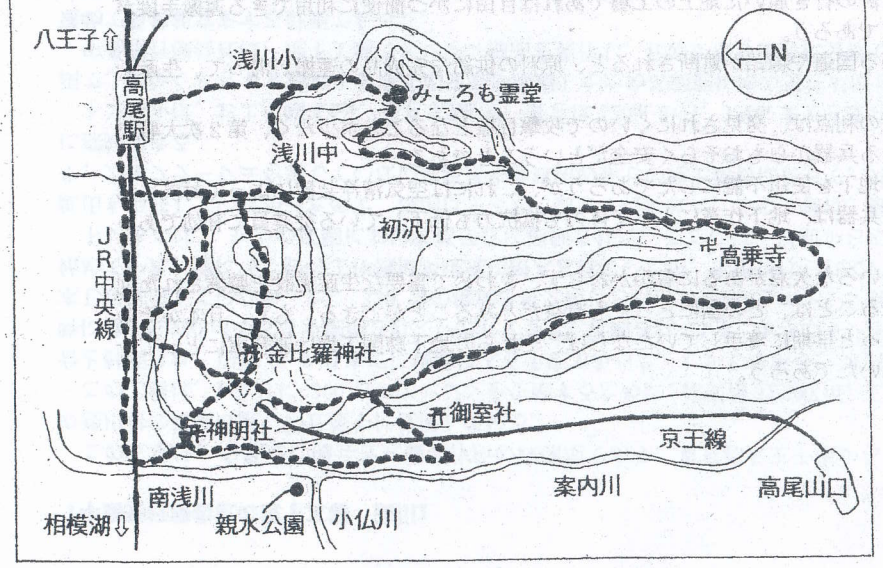
浅川地区
史跡・自然公園の実現を！

私たちは提案します……

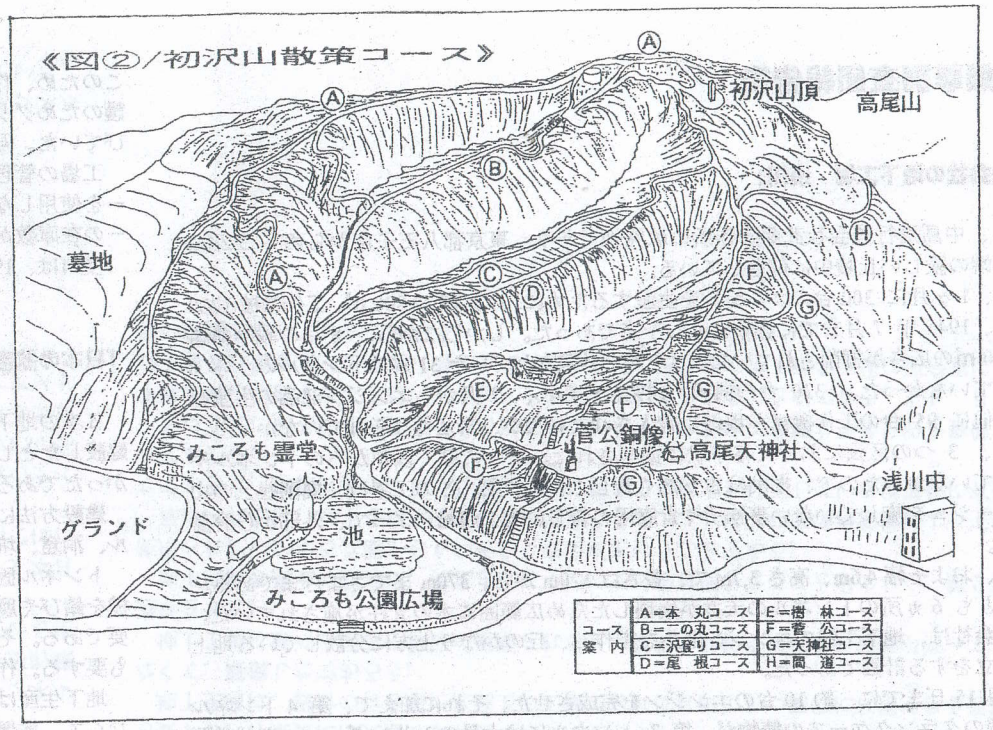
八王子市に私たちが提出していました「金比羅山の公有地化」の請願が平成6年3月市議会で採択され、これにより初沢山を含む史跡・自然公園構想が現実のものとなりました。以来、いろいろなアイデアが持ち寄られ、検討を重ねてきました。差し当たりは金比羅山と初沢山に親水公園を加えた区域の公園化が主体ですが、将来的には初沢川源流までも含めた広範囲な自然公園を実現したいと考えています。

皆さんもすばらしいアイデアをお寄せください

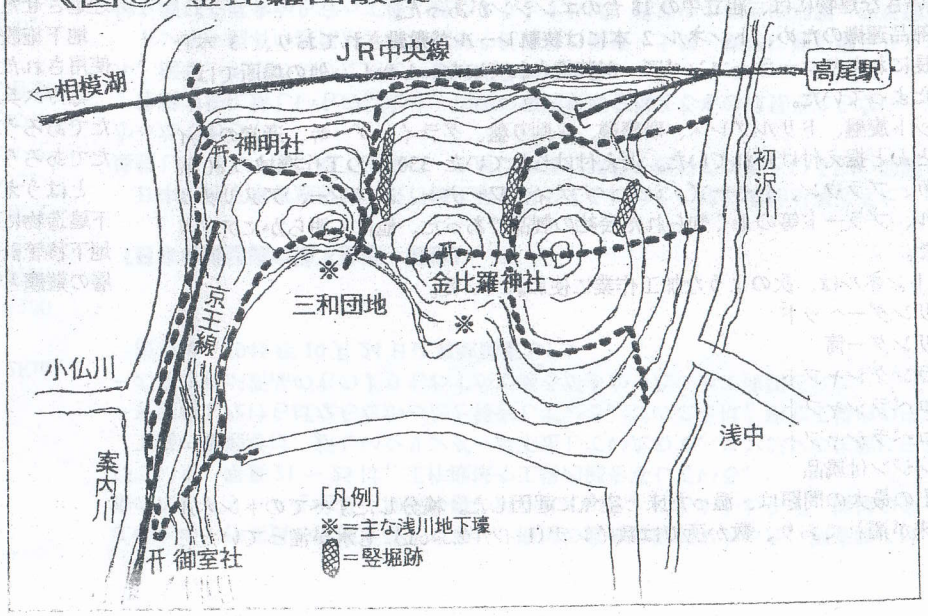
《図①／浅川地区史跡・自然公園周遊路》

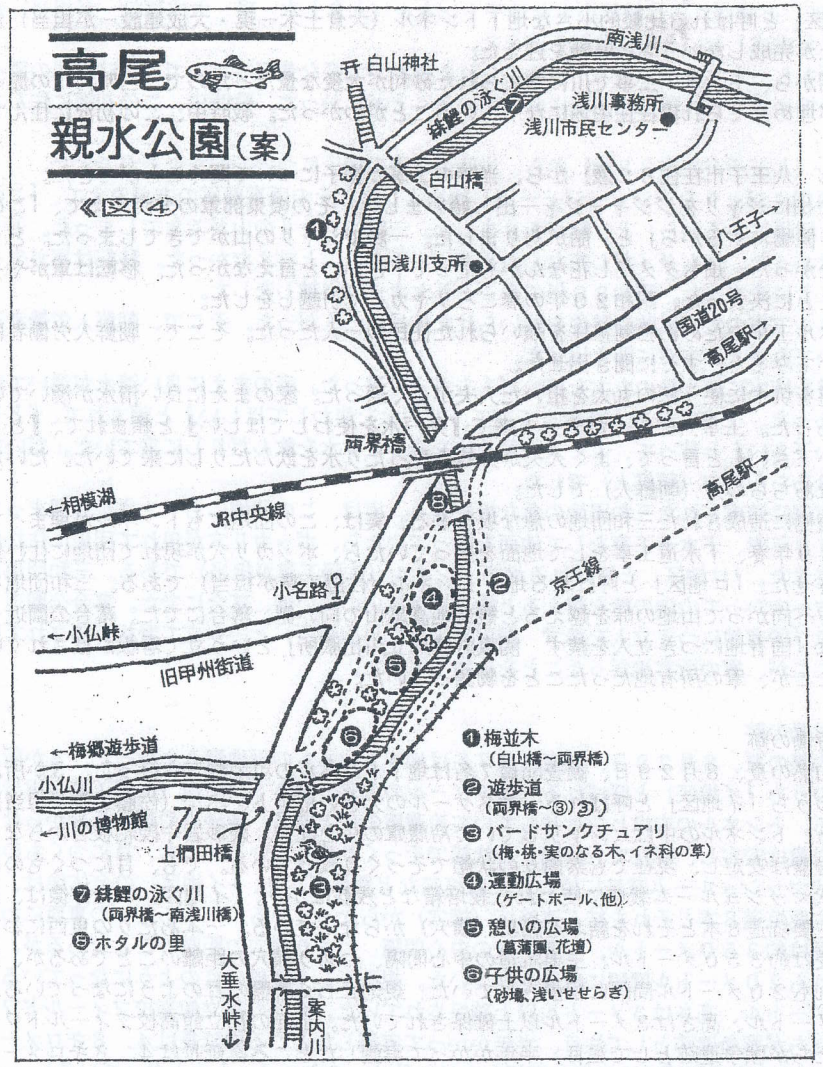


《図②／初沢山散策コース》



《図③／金比羅山散策コース》





史跡・自然公園(基本構想)案

1. 公園の区域
初沢山、金比羅山、南浅川合流点を中心に東高尾山陵北部から初沢川上流域を含む地域とする。

2. 公園の目的
(1)現存の動植物の保護・育成をはかりつつ市民がこれらの自然に親しめる場を形成する。
(2)初沢城跡等の中世史跡と浅川地下壕の保存整備をはかり、市民の学習の場として公開する。
(3)箇所ごとに散策コースを整備し、森林浴、川遊びなど健全なリクリエーションの場を提供。

3. 公園の施策　基本的には都立長沼公園の諸施策をモデルとし、個別的には次の施策を講ずる。
(1)初沢山、金比羅山(図②、③)…史跡の保存、公開をはかるとともに、各散策コースを整備もしくは新設する。
(2)親水公園(図④)…案内川、小仏川合流点の河川敷を親水公園として図のように整備する。
(3)大周遊路の造成(図①)…金比羅山～親水公園～東高尾山陵～初沢川～初沢山を巡る周遊路。

金比羅山造成阻止と公園化の展望

高尾・浅川の自然を守る会

⑦

Ⅰ　会の創立と金比羅山造成反対運動の経緯

1978年4月　矢野学園、金比羅山造成計画発表。
1985年12月　高尾・浅川の自然を守る会創立。
12~3月　造成反対署名運動、計3,500名分を都知事に提出。
1986年2月　都自然環境保全審議会本会議、審議開始。
1989年8月　八王子市議会都市建設委員会、反対陳情不採択。
12月　八王子市長、金比羅山造成計画同意書を都に提出。
1990年9月　東京都、金比羅山開発許可。
1991年3月　八王子市議会、浅川地下壕の調査をすすめてきた研究グループの提出した、「浅川地下壕保存と平和資料館建設」に関する請願を採択。
4月　金比羅山、造成工事開始。
12月　「浅川金刀比羅講」、社殿を保存登記。
1992年1月　金比羅山腹に初沢城外郭遺構の竪堀跡発見。
1993年5月　矢野学園、金比羅山への移転断念を市に通告。

Ⅱ　金比羅山・初沢山一帯の公有化と公立公園化構想

1993年8月　金比羅山・初沢山の公有化請願運動の展開。
9月　公有化請願署名、計2,033名分を市議会に提出。
1994年3月　八王子市議会、公有化請願を採択。
6月　「浅川地区史跡・自然公園」構想案策定・発表。
浅川地区内各団体代表及び各市議会議員に説明、協力方を要請。
7月　八王子市都市計画室長に公有化並びに公園構想を説明。実現方を要請。
10月　八王子市長宛て「初沢山・金比羅山一帯地域の公有化と公立公園建設方」について陳情書提出。
1995年10月　八王子市、公園計画に伴う初沢山・金比羅山地域の境界確定測量説明会を開催。
11月　境界確定測量開始。

Ⅲ　浅川地区史跡自然公園実現に向けて

2005年3月　八王子市、広報はちおうじ3月及び4月号に「みどりの保全に係わる新施策」を発表。
4月　市、環境保全課、都市計画室、公園課を歴訪して、新施策の適用方を申入れ。
5月　市環境部長に「浅川地区史跡・自然公園構想」について説明し、この新施策の適用方を要請し、市長宛てに陳情書を提出。
2006年2月　「市街地丘陵地のみどりの保全に関する条例に基づき金比羅斜面緑地保全区域(69,978㎡)を斜面緑地保全区域に指定する」との八王子市告示第49号を受領。

⑧ 強制連行２００人計画が判明
― 浅川地下トンネル・中島飛行機地下工場

中田　均

皇土防衛作戦

浅川という旧地名は、東京都八王子市の西にあるＪＲ中央線高尾駅周辺一帯を指す地域である。都心から約５０キロメートルの距離にある。

関東山地のはじまる浅川の高尾山麓には、陸軍の東部軍によって掘削された巨大な地下トンネルがある。着工されたのは敗戦１年前、１９４４年の秋で、この時期には浅川（東部軍）以外にも長野の松代（大本営移転）をはじめ、岐阜の平牧（中部軍）、大阪の高槻（中部軍）、福岡の山家（西部軍）など軍が直接使用する大規模な地下トンネルの建設が始まった時期でもある。

東部軍とは、関東・東北・甲信越を防衛分担地域とする陸軍部隊のことであるが、この東部軍の任務について、「防衛総司令部の皇土防衛作戦要綱」（１９４４．５／９）には、次のように触れられている。

東部軍は、先ず速やかに伊豆諸島の戦備を強化し次いで八戸地、仙台平地、水戸平地、房総半島、相模平地付近要域に於ける戦備を強化して遊撃態勢を整え、敵の侵攻に方りては機を失せず之を水際付近に撃滅す。伊豆諸島、八戸平地、房総地区に重点を置く。

（防衛庁　戦史叢書『本土決戦準備〈１〉関東の防衛』）

要するに、アメリカ軍による本土の空襲や侵攻に備えるための「皇土防衛作戦」のことである。敗戦色濃くなった１９４４年７月、絶対国防圏の一角サイパン島をアメリカ軍に奪われると、Ｂ29 による本土空襲必至とみた陸軍が、関東沿岸の防禦作戦準備として、浅川に食糧や弾薬などの備蓄場所あるいは地下司令部を配置しようとしたのである。そして、このような緊急で重大な地下軍用トンネルの工事現場では、多くの朝鮮人が動員され酷使されることになるのである。

西東京朝鮮人強制連行調査団は、１９９４年春から夏にかけて、工事に関わった朝鮮人の軌跡について調査を行った。まず、７月には飯場跡や地下トンネル周辺を予備調査した。

高尾駅へ集合、南口へ降り、かつての朝鮮人飯場（初沢・落合・原）のうち初沢の飯場跡へ向かった。浅川小学校から南へ、みころも霊園に行く道の両側全部には、飯場の長屋が合わせて２０棟くらいあった。

最も劣悪な飯場生活

トンネル工事の関係者数名から聞き取りをしてまとめた、郷土史の文献『武州八王子史の道草』（１９６８年　鈴木龍二著）の中には、朝鮮人の飯場生活について、生々しく記されていた。

当時の集団部落は、主に作業労務者の飯場として、最低の衣食住が保証されるだけの最も劣悪な飯場生活があるだけで、５、０００人からの労務者の集団にこれといった慰安娯楽の施設などある筈がなかった。妻子があるのは数名の飯場長、親方だけで、まさに純然たる男の集団であった。それこそ殺風景な、強制労働に蠢く奴隷的桎梏の下に作業の外は飯場小屋に動物のように寝そべる外はないものであった。

現在は、産業殉職者の霊堂である、みころも霊園の駐車場や民家に変わっていた。周辺を探索してみたら、やっぱりそこには「殺風景な、動物のように寝そべる外はない、飯場小屋」の一部が、５０年の歳月を乗り越えて今でもひっそりと残っていた。

初沢川に沿った緩やかな登り道をたどり、浅川中学校の横に着く。この中学校の南側の初沢山には、「ハ地区」と呼ばれる比較的小さな地下トンネル（大倉土木ー現・大成建設ーが担当）が掘り抜かれたが完成しないうちに敗戦を迎えた。

関係者の話から、トンネル工事で川に捨てられた砂利が大変な量だったので、当時河川の原っぱだったのが埋め立てられ現在住宅地になっていることがわかった。戦時中、この初沢に住んでいた

武井昌江さん（八王子市在住８２歳）から、当時の工事の様子について聞くことができた。

家の前の畑にジャリをジジャージャー出し始めました。その頃東部軍の方がみえて、「この畑をジャリ置場にするから」と、話がありました。一晩でジャリの山ができてしまった。どうしようもなかった。畑もダメだし花なんかも待って下さい、と言えなかった。移転は軍がやってくれることに決まった。昭和２０年の春ごろリヤカーで引越しをした。

このトンネル工事のために強制移住を強いられた住民の一人だった。そこで、朝鮮人労働者についても聞いてみると、すぐに聞き出せた。

家の裏道を坑木に使う松の丸太を担いだ人夫がよく通った。家のまえに良い清水が湧いていて井戸があった。工事人夫の人がやって来て『井戸水を使わしてほしい』と頼まれて、『どうぞ、お使い下さい』と言って、よく人夫が身体を洗ったり水を飲んだりしに来ていた。だいたい労務者はあちらの方（朝鮮人）でした。

金比羅山南側に造成された三和団地の急な坂を登る。実は、この団地にもトンネルが埋まっていて、１９８９年春、下水道工事をして地面を掘っていたら、ポッカリ穴が現れて団地に住む住民をあわてさせた。「ロ地区」と呼ばれる地下トンネル（佐藤工業が担当）である。三和団地をあとに西の方へ向かって山地の峠を越えると観光地高尾山の向い側、落合にでた。落合公園近くの空き地には「国有地につき立入を禁ず　関東財務局立川出張所」という立て看板が標されていた。かつてここが、軍の所有地だったことを物語っていた。

苦しい強制労働の跡

記録的な灼熱の夏、８月２９日、調査団員７名は地下トンネルの現地調査を行った。３か所あるトンネルのうち「イ地区」と呼ばれる一番スケールの大きい地下トンネル（佐藤工業が担当）に入ってみる。トンネルの中はヒンヤリしていて冷蔵庫の中と同じ。硬砂岩や硬粘板岩からなっているので岩盤は安定し、現在でも素掘りの状態でそっくり残っている。でも、目につくものは１９７０年代マッシュルーム栽培に使われた栽培箱など残骸ばかり。「イ地区」の全体像は、東西に伸びる主要坑道８本とそれを結ぶ連絡坑（横穴）からなっている。一本あたりの東西にわたる坑道の延長は約３５０メートル。主要坑道の中心間隔、つまり横穴の距離のことであるが、実測ではいずれも２０メートル間隔に配置されていた。規則正しく碁盤の目のようになっている。坑道幅は４メートル、高さは３メートル以上確保されていた。地元の都立館高校フィールドワーククラブ員たちが戦争遺跡として注目、半年かかって実測したところ総延長は４．８キロメートルであった。（土木学会編『土木工学の概観』では、約４．２キロメートルとなっている）

トンネルの岩肌には、削岩機と火薬（ダイナマイト）が使用された跡が、数え切れないほど発見できた。人があまり行かない坑道の奥には、太さは２０～３０センチメートル位のしっかりした松の丸太が転がっている。東端の坑口付近では壁側の左右に４～５本の立ったままの坑木を見つけることができた。腐った部分がはげ落ちやせ細っている丸太は、いまにも倒れそう。当時の状況を忘れ去られまいとかろうじて立っている。トロッコの枕木跡もはっきり残っている所があった。岩に刺さっているクイや釘、カスガイ・ロットも見つかった。地下トンネルを観察すればするほど、植民地支配を受けていた朝鮮人労働者たちの苦しい強制労働の跡が大型懐中電灯のライトに浮かびあがってきた。

完成した発動機は１０台

やがて、この「イ地区」はアメリカ軍の空襲を避けるため、航空機エンジンの地下疎開工場として転用されることになる。

サイパンのマリアナ基地から飛来したＢ 29 爆撃機は、日本本土に対する最初の本格的空襲として１９４４年１１月２４日中島飛行機武蔵製作所を爆撃する。中島飛行機武蔵製作所は、現在の武蔵野市西部にあった大軍需工場で、最盛期には４万人の労働者を抱え国内２５％の生産を占めた日本一の大発動機工場であった。アメリカ軍により、武蔵製作所は、その後十数回の爆撃に合い壊滅的打撃を受け、浅川など数か所へ疎開することになる。翌年６月には、浅川地下工場として「従業員１、０００名の規模」（『富士重工業三十年史』１９８４年）で操業が開始された。

『米軍戦略爆撃調査団報告書』（１９４７年）によると、１か月に３００台のエンジンを生産するために、床面積３２、０００平方㍍、工作機械１、２００台と計画され、１９４５年7月までに操業に入る予定であった。しかしながら、８月の戦争終結時には２３、９００平方㍍の広さしか掘削されていたにすぎず、計画されていた３１本のトンネルのうち６本しか完成していなかった。結局、敗戦までの２か月間の操業期間に３３０台の工作機械が据え付けられ、完成した発動機はわずか１０台にすぎなかった。

また、地下工場の問題点としては、つぎのように記されていた。

この工場の操業上の主な問題は、湿った床と湿気に起因していた。NO １から NO ６まで全てのトンネルの床は湿っぽく、数ヶ所で１０ cm 以上の浸水下にあった。これは、多数の労働者の健康を害し、機械には、深刻なさびの原因となった。点検時には、機械は保護のためグリースを塗り、油紙でカバーをされていた。それにも拘わらず機械の多くはひどくさびていた。

地下工場の痕跡としては、木の枝に取りつけられた碍子や工作機械の土台に使われたと考えられるコンクリートの枠などが確認できた。「機　中島飛行機」とナンバーが表示されたアルミ製のコイン状プレートも発見。また、しっかり土の中に埋まっていた細い板も残っていた。トンネル内で部品を運搬するための狭軌レールの枕木跡であろう。

調査終了後、近くの高乗寺で休憩。室町時代に創建されたこの高乗寺も、戦時中のトンネル工事では、東部軍の移転命令から危うく免れたが、中島飛行機の地下工場になると、浅川（現・高尾）駅からの引き込み線や奥には関連工場が建設され始める。そして敗戦後は、駐留してきたアメリカ兵の宿舎に使われた所でもあった。狂気の時代を目撃しくぐり抜けてきた高乗寺…。のんびりと霊園へ墓参りする人たちをあとに調査団は、帰途に着いた。

卒業生台帳と過去帳を調査

朴慶植氏が１９６０年代に調査した『朝鮮人強制連行の記録』（１９６５年）にも、「高尾（浅川）にあった中島飛行機会社地下工場建設」として報告されている。やや長くなるが、この箇所をすべて引用しておく。

中島飛行機会社の地下工場は各地でつくられたが、高尾山近くにある高尾武山でも１９４４年頃から着工され多くの同胞が連行された。現在高尾市には５０世帯ぐらいの同胞が住んでいるが、そのうち１５世帯程度は当時ここで働いていた人びとである。現在ここに住んでいる朴氏は大倉組の下で長く土木工事に従い、静岡県焼津トンネルの仕事をしているときハッパのため耳をやられ、その後この高尾でも働いた。筆談できいたところによると同胞は大倉組、佐藤組、池田組のもとでだいたい２０００名ぐらい動員されており、山の下を１０か所ばかり６００メートルぐらい掘ったとき日本の敗戦となった。ここで４名ばかり同胞が事故で死んだが、負傷者も多かった。しかし会社側はこれらの犠牲者についてはひたかくしにかくしていたので、実際は非常に多いはずであるという。

文中の「高尾市」とは誤りで、すでに浅川町が八王子市へ合併しているので「八王子市」のことである。また、ここからは、静岡県の焼津から浅川へ移動してきたことや４名の犠牲者が出たとがわかる。６か月という短期間でしかも三交代の突貫工事なので、犠牲者も多く出ただろう。

そこで、現地調査に先立って調査団は、６～７月にかけて朝鮮人の存在を公的文書で裏づけるものはないか、周辺の小学校やお寺を数回にわたって調査した。

飯場跡に隣接する浅川小学校（当時浅川国民学校）へ地元の大日向宏八王子市議会議員と共に訪ねた。ここでは、昭和１９年度（昭和２０年３月卒業）の卒業生台帳が残され、生年月日の順で児童名が記載されていたが、どういうわけか１０名だけが最後にまとめて記載されていた。住所も「上椚田」・「上長房」という初沢と原の飯場に該当する。工事関係者の児童たちであることは確実だ。創氏改名された朝鮮人の児童たちであろう。児童たちは、卒業生台帳でも差別されていたのである。

また地元のお寺を調査してみたところ、浅川小学校北側にある大光寺では過去帳に「半島人」と注記入りの死亡者５名を発見した。また、落合側に近い金南寺でも１４名の死亡者の名前が記されていたのを確認。ただ、これらのうち、２歳から１２歳の子供が１０人を占めているのが特徴で、成人男子の死亡者数は４人だった。もちろん、死因は記されず、遺骨もあるかどうかもわからないという。中には、１９４５年３月１０日、下町の深川で東京大空襲にあい、３４歳の母親と１２歳と９歳の少女たち合わせて３人を失なったケースが記されていた。「軍工事ノタメ来浅者」である父親が、３人の家族を弔うためにお寺へ来たのだろうと、大光寺の松村光恭住職は説明してくれた。

使い捨て重筋労働者

調査団は、浅川の地下トンネルに関わった関係者から聞き取りを行って『地下秘密工場』（１９９０年）を著した斉藤勉氏から、大変貴重な日本人関係者の『証言コピー』をいただいた。

なお、この日本人関係者とは、建設会社の佐藤工業（陸軍の委託→運輸通信省の監理→発注→佐藤工業）の担当者２名である。

―　佐藤工業の社史によりますと１１月から仕事を始めていますが…。

…小原の部隊を中心にしてやるというんだけれども、隧道工事だからやはり黒部のね、富山県の黒部の所でね、高熱隧道を掘っていましてね、それが終わったその当時の従業員を林と岡田というのが隧道掘っていたんですがね。その連中が富山県の宇奈月におったんですけれどもね。それを入れようということで宇奈月へ行ったんですよ。（……）それで僕はね、宇奈月へ飛んだわけだよね。準備するためにね。それと小原の部隊とね。それらが合流してだんだん増えていったわけですけれどもね。だから、本当に隧道を掘り出したのは１１月ころ…。

―　事故でなくなった人はいますか。

ここはそんなもんなし、それはおそらくね、強制徴発した労務者がいたんでしょ……そういう連中が残ったんでしょうね。山の中へ逃げたりしてね、死んだのなんか、おったけれどその時分にはもう

―　８月２日（八王子空襲）以降、朝鮮人が空襲警報が鳴るとトンネルへ逃げ込んで仕事にならなかったという話があるんですが…。

それもありましたね。

あれは軍の兵隊さんが先に入るんだね。先に入るんでこっちの労務者（朝鮮人）は、中へは入れなかった。

ここからは、佐藤工業の朝鮮人労働者たちの多くは、富山の小原と宇奈月から飯場頭とともに

浅川へ移動してきたこと、朝鮮人の中には、強制徴発ー徴用先から浅川へ逃亡してきた者があったこと、朝鮮人が単なる使い捨て重筋労働者としてしか扱いを受けなかったことなどがわかった。

そして、後で調べてみると富山の小原と宇奈月では、合わせて４１７名の強制連行の事実がわかった（中央協和会の１９４２年移入朝鮮人労務者状況調）。「富山で強制連行され、その後に浅川へ移動した朝鮮人もいたのでは？」という仮説も十分に成り立つのである。

さらに、終戦前日の８月１４日には、軍から「松代の仕事が遅れているので応援に行け」と命令が下ったり、運輸通信省の責任者から呼ばれ、「いよいよ日本は降伏だ、明日は重大放送があるから、その前に労務者が持っていた火薬全部取り上げてどこかわからない所へ隠してくれ」と指示されていた。なお松代への応援については、鉄道引き込み線工事を担当していた青木組朝鮮人５００人へも「現在の労務者の中から１、０００名ぐらい、引きつれて、信州の松代の工事に応援に行くように」（青木保三著『七十年を顧みて』）と命令を受けていたが、幸いにもこの命令は、実行されずに済んだ。

―　８月１５日以降のことは…。

…とにかく第三国人だから、帰すこと、残すなら残る、それを調べて食べ物とかお金とかの手当てをしなくちゃいかんというので女・子供全部その数報告せい。倉庫を開けて倉庫にこれだけ米が残っているんだと、これをみんなで分けろとそれから配給をもらえとみんなでわけてやりました。お金は鉄道と話をしてもらい次第、大人は２００円、女の成人は１００円、子供は５０円か区別して幾日分だか国へ帰るものは申し出ろというんで、それで金みんな分けてやって、鉄道からもらってきた。報告された朝鮮人の数は、女・子供全部含めて１、５００人ぐらいいた。１０月か１１月ごろですか、朝鮮へ帰る切符、手続きを一括してやったんです。…

この帰国処理について、佐藤工業は富山の本社の指示を待たずに旅費・切符の支給や帰国手続きをいち早く行ったが、そうできなかった大倉土木では、朝鮮人たちによって会社所長が監禁される事件も起きていた。

…大倉土木の所長は捕虜になっちゃった。大倉土木は、支払いとかなんか現地で勝手にやれないんですね。いちいち本社へ行かなくちゃだめなんだ。

僕はもう本社は富山だからね、そんなもん聞いていたら大変だから、自分で鉄道から金をもらって

…とにかく早く帰さなきゃ。こんなもんで捕虜になったらかなわんと思ってね。それは良かったんですよ。（朝鮮人は）その後何も言ってこないもの。

解放後、新国家建設のために一日も早く帰国を望んだ浅川の朝鮮人たちは、１９４５年１０月、浅川（現・高尾）駅をあとに品川駅へ結集、集団的に帰国していった。この様子については、『武州八王子史の道草』にも、「戦争は終わったのだ祖国独立の機会がきたのだ、何をおいても帰国だと、その大移動がはじまった。（……）１日３００人位、ついに９０％の彼らが帰国していった。」と朝鮮人帰国のために尽力した飯場担当警官の美談をとおして、記されていた。当時の住民にとって印象的な出来事であったのだろう。

では、トンネル掘削工事と中島飛行機の施設工事で動員された朝鮮人の数は、どの位になるのだろうか。関係する文献を調べてみた。鈴木龍二氏の『武州八王子史の道草』では「５、０００人からの労務者」と記されていたが、浅川の全労務者の食糧配給を一任されていた青木組の青木保三氏は、『七十年を顧みて』の中で「最盛期には、中島関係と私の方とを合せ、全労務者は３、０００名に達した」と記録している。斉藤勉氏は『地下秘密工場』では、佐藤工業の場合は、帰国した朝鮮人の数を根拠に５００人（家族も含めると１、５００人）とし、さらに大倉土木１００人・青木組５００人、合わせて約１、１００人と割り出している。

根拠が明らかでない５、０００人説はともかく、根拠がはっきりしている斉藤氏の調査と青木氏の記録の人数が考察の対象になるだろう。とすると、斉藤氏の１、１００人（含家族　１、５００人）は最小人数で、青木氏の３０００人が最大人数と考えられるのではないだろうか。これらの事実関係と飯場の規模などから推定すると工事の最盛期には朝鮮人労働者数は、２、０００人前後、家族も含めると約３、０００人という数が妥当な人数ではないだろうか。

『これが運命だ』

今では、工事に携わった関係者からの聞き取りは、極めて難しい。富山から移動してきた以外の朝鮮人労働者たちは、浅川へどのようにして動員されてきたのだろうか。佐藤工業配下の山田組の事務を担当していた安藤金之助氏（八王子市在住８９歳）に聞いた。

山田組は７０人。僕だけが日本人だった。人夫は全部朝鮮人だった。長く日本にいたから日本語は結構みな話せた。朝鮮人人夫は、女房を国（朝鮮）へ置いてきているので家族持ちはいなかった。年令は３０代前半の人が多かった。みな働き盛りばかりだった。朝鮮人は、友達同志で呼び寄せたりして『ここにこういう仕事があるから』と言って自然に次から次へと山田を訪ねて集まって来た。だからどんどん増え、ほとんど自然の寄り集まりだった。

この証言の中で「自然に次から次へと集まってきた」とは、一体どのようなことなのだろうか疑問が残った。そこで、数少ない朝鮮人側の聞き取り調査も行った。

その一人、姜壽熙ーカン・スウヒ氏（八王子市在住　７１才）は、１９４３年３月、田舎の巡査と日本人が来て「皇国臣民として日本のために働け」また、「金儲けができるから」といわれ強制連行で日本へ。ところが、連行先の静岡日本坂トンネル工事では、厳しい監視のもとで人間扱いされなかった。待遇改善を要求したリーダーがその後いなくなってしまった。逃亡もくわだてたが失敗した。

その後、１９４５年４月浅川へ来て大倉土木の倉庫番を担当した。

浅川へは飯場頭と一緒に来た。日本坂工事へ強制連行された２００人のうち、みんな逃げちゃって、浅川へ来たのはたったの４～５人だった。　私のいた飯場では、数名が所帯を持っていたが、あとは独身だった。わたしたち引っ張られてきた者たちは、賃金はほとんどもらえなかった

し、わたし自身はもらったことがない。　（……）　日本坂では苦しめられたが、浅川に来たら監視はなく自由の身になったと同じだった。強制連行されてからの２年間はけっこう長かった。最後には、『これが運命だ』と思ってあきらめちゃうから…。

徴用から逃れてきた若者

さらに、金棋燦ーキム・ギチャン氏（八王子市在住　７３才）も、１９４３年３月、北九州の炭坑へ強制連行され、全国の工事現場を歩き、最後に浅川へ来て池田組の下でエンジン試運転場や道路の建設をやらされた。

知人に呼ばれて福井から浅川の現場へ来た。浅川での飯場生活では、食事と物資面などは良かった。飯場は初沢にあった。　隣には佐藤工業の飯場があり、頭に包帯を巻いていたり松葉杖をついて歩いていた人をたまに見かけた。佐藤工業の朝鮮人は、熟練したトンネル掘り技術者が多く、家族持ちの年配者が多かったようだ。

金氏は、強制連行先の若松（北九州）では囚人扱いを受けたので、逃亡したが捕まり拷問を受けた。その後、また逃亡。雑司ケ谷、成増、名古屋、福井の４つの工場や土木現場を点々として浅川へ来た。浅川の池田組の仲間について突っ込んで聞いてみた。

すると、

私の飯場仲間１６～７人のうち５～６人は、家族持ちであった。残りは２２～３才位の若者

で私のように川崎鋼管（※川崎にある日本鋼管か）や三鷹の軍需工場から逃げてきた者だった。
（……）これまでの工事現場では、『あの人は徴用で逃げていて仕事は何も知らないんだ』という会話がされていたくらい、若い者は徴用から逃げてきた者だったと思う。成増と浅川は、東京に近いせいか徴用から逃げてきた若者が多かった。

という金氏の証言が得られ「自然に次から次へと集まってきた」ことの意味がやっとわかりかけてきた。集まってきた朝鮮人の中には徴用先から逃れてきた者もいたのだった。

強制連行の計画が…

調査も一通り終了した１９９５年５月。調査団は、国会図書館で重要な事実を突き止めた。

国会図書館に保存されているマイクロフィルムから「浅川工事へ２００人の朝鮮人を強制連行しようと計画していた」という事実が判明した。このマイクロフィルムとは、米軍戦略爆撃調査団が報告書を作成するために使った資料などからなっており、この存在については、関係者も以前から「浅川についても何か資料が残っているのではないか」と注目されていたものである。

この資料には、「昭和２０年度第一次朝鮮人労務者割当表」（1945 年 4 ～ 6 月）で、日本土木建築統制組合によってまとめられ、全国１４ヶ所の軍事関係工場や施設、鉄道工事現場に対する朝鮮人労働者の動員計画が記されている。動員先としては、浅川の他に、長野の松代をはじめ、岐阜の平牧や福岡の山家などが記され、合わせて４、５００人の朝鮮人が動員される計画であった。

浅川の場合は、第二期工事でハ地区地下トンネルを掘削担当した大倉土木が日本土木建築統制組合に朝鮮人の動員を要請し、その結果２００人認められたことがわかる。また、この朝鮮人労務者割当表は、「勤労局」という厚生省管轄で作成されたのもで、政府による朝鮮人動員の計画を示している。　いわゆる「強制連行」である。　また、この資料は朝鮮人動員の計画を示しているが、１９４４年９月から始まった第一期工事でも、このような強制連行の計画が存在し朝鮮人が動員されたかもしれない。

以上、調査の結果、1.強制連行の計画があったこと、2.強制連行先から浅川の現場へ、3.徴用先から逃げて浅川へ行き着いたケース、4.使い捨て労働者として扱われ、敗戦間際には「松代への動員命令」が出ていたこと、がわかった。

さらに、5.在日一世朝鮮人の証言では、強制連行された労働現場には人権や自由はなく、あるのは「そこにいて強制労働で酷使されるか」あるいは「命をかけてそこから逃亡するか」の選択しかないのである。このような逃亡は日常茶飯事に起きていた。そして、逃亡しても待っていたのは同じような労働現場だったのである。　（１９９５年８月）

注　この報告文は、１９９５年３月発行の『統一評論　第３５７巻』へ掲載された「西東京編－異国に刻まれた怨恨の史実」に加筆・訂正したものである。
なお、本文中の証言者の年齢は、調査した１９９４年時の年齢である。

参考文献

・『米軍戦略爆撃調査団報告書　第３５巻』　1947 年
・八王子市郷土資料館編『八王子の空襲と戦災の記録　総説編』
　八王子市教育委員会　1985 年
・斉藤　勉著『地下秘密工場』のんぶる舎 1990 年
・鈴木龍二著『武州八王子史の道草』多摩文化研究会　1968 年
・設楽政治著『高尾山麓夜話』1972 年
・青木保三著『七十年を顧みて』
・土木学会編『土木工学の概観』日本学術振興会　1950 年
・朴慶植著『朝鮮人強制連行の記録』未来社　1965 年
・『聞き取り～これが運命だ』都立館高校ﾌｨｰﾙﾄﾞﾜｰｸｸﾗﾌﾞ　1994 年
・朝鮮人強制連行真相調査団編『強制連行された朝鮮人の証言』
　明石書店　1990 年
・兵庫朝鮮関係研究会編『地下工場と朝鮮人強制連行』明石書店　1991 年
・浄法寺朝美著『日本防空史』原書房 1981 年
・『富士重工三十年史』1984 年
・『大和運輸五十年史』
・坂本悠一著「本土決戦と高槻地下倉庫」『戦争と平和』所収 1995 年